

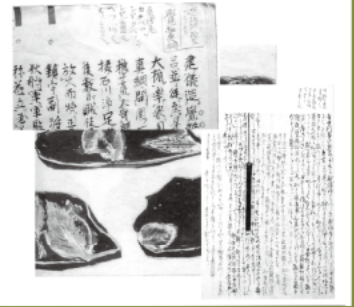
真澄

MASUMI
No.32



真澄、 学びの技法

平成26年 6月28日(土)～ 8月17日(日)



1 写して学ぶ

真澄には、十種類ほどの所謂「書写本」があります。これは、書物（版本や写本）を写したもので、真澄は実に根気強く写しています。当時の出版事情から考えると、版本が希少で高価であったため、書物をいつでも利用するために、書物を写して手元に置くことが比較的安価にできることだったのです。写し方には、元になった書物を一字一句写すものと、文章の必要箇所を見極めて写すものがあります。この場合、考えながら、理解しながら写すことになりす。

書くことによって記憶に定着することは、私たちが経験的に知っていることです。真澄が記録の中で見せる博覧強記は、このような絶え間ない努力の上にあることが、書写本の筆致から知ることが出来ます。

2 メモる

真澄の著作として知られる資料に、「雑纂」に分類されているものがあります。巻頭から巻尾まで一貫した記述がなされているものではなく、書きかけの文章や走り書き、書き付けが一冊にまとめられているものです。

完結したものではありませんが、雑纂の筆致を追っていくと、真澄がどのようなことに興味を持っていたのか、何を書こうとしていたのかなど、真澄の努力のようすが浮かび上がってきます。そこが雑纂を読み解く楽しみでもあります。

菅江真澄は、旅を通じた人々との交流の中で、学習を積み上げていきました。その結果が二百冊にも数えられる多くの著作であり、数多くの遺墨資料でもあります。印刷物が氾濫し、学習の機会が多い現代とは異なり、真澄の時代は、自らが意識しなければ物事を学ぶ機会は多くはなかったことでしょう。真澄は学びながら書物を著し、書物を著す中で学習を深めていきました。

その学びの方法を、写して学ぶ、メモる、見出しで活用、日記を見せる・読む、書物の入手、硯へのこだわりなどの六つから紹介しました。真澄の著作の総体は、たえまない努力の結果と言えます。真澄の学びの技法を考えながら、現代の私たちの学び方について、今一度振り返る契機にしてください。

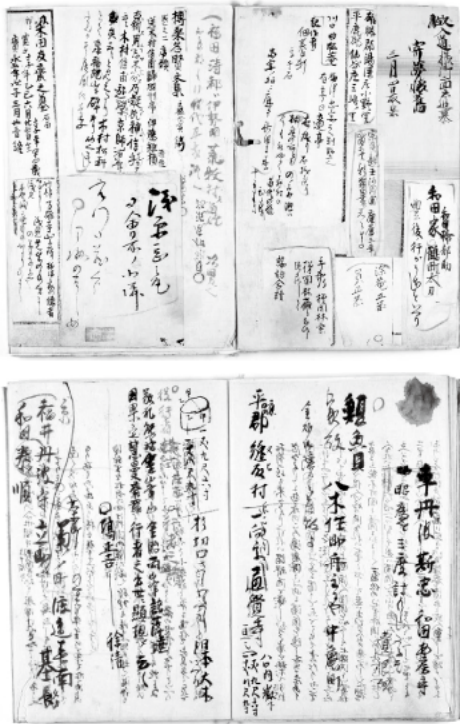
物事を知ってはメモし、メモしては考え、さらには、そのメモを大事にとっておくことも、真澄の性格を表しているように思えます。

版本「群書一覽」から書写本「真隣雑抄」(館蔵)への写し

群書一覽	類別	総数	省略	真隣雑抄	%
1	一 卷 国史	43	23	20	
2	神書	127	114	13	
3	雑記	53	20	33	
4	二 卷 録	51	33	18	
5	有識	108	80	28	
6	氏族	56	50	6	
7	字書	42	41	1	
8	往來	10	8	2	
9	法帖	54	29	25	
10	三 卷 物語	114	66	48	
11	草子	37	34	3	
12	日記	14	8	6	
13	和文	9	9	0	
14	記行	28	16	12	
15	四 卷 撰集	88	56	32	
16	私撰	19	17	2	
17	家集	162	131	31	
18	歌合	13	11	2	
19	百首	62	61	1	
20	千首	20	20	0	
21	五 卷 類題	38	38	0	
22	和歌	22	22	0	
23	撰歌	22	22	0	
24	歌学	131	122	9	
25	詩文	43	41	2	
26	医書	29	21	8	
27	教訓	23	19	4	
28	釈書	24	19	5	
29	管絃	25	12	13	
30	六 卷 地理	35	30	5	
31	名所	39	39	0	
32	隨筆	46	43	3	
33	雜書	113	100	13	
34	群書類従目録	0	0	0	
		1700	1355	345	20.3

「群書一覽」は、国書を分類して、解題を施した書。尾崎雅嘉著。享和二年(一八〇二)刊。全六巻に三十四の類別を設けている。本表では、解題が付された項目の総数、「真隣雑抄」での省略数、書写数、項目総数に対する書写数の割合を一覧表にした。本表のうち、34「群書類従目録」は書名だけの掲出のため、総数には含めていない。(数字は「館」による)

「群書一覽」は、国書を分類して、解題を施した書。尾崎雅嘉著。享和二年(一八〇二)刊。全六巻に三十四の類別を設けている。本表では、解題が付された項目の総数、「真隣雑抄」での省略数、書写数、項目総数に対する書写数の割合を一覧表にした。本表のうち、34「群書類従目録」は書名だけの掲出のため、総数には含めていない。(数字は「館」による)



《混雑当座右日鈔(こんざつとうざうにっしょう)》

(大館市立中央図書館蔵、秋田県指定文化財)

冊子名は、「混雑」した「座右」にすべき「日鈔」(日々のメモ書き)という意味なのでしょうか。貼り込まれた紙片には、さまざまな大きさの文字(まさしくメモ書き)が書かれています。このような形態の冊子は、真澄の資料では類例がありません。

3 見出しで活用

真澄が調べるために幾度となく使った書物には、現在の「付箋」に相当する紙片が貼られていることがあります。

中には、自筆草稿である《乙随筆》(大館市立中央図書館蔵)のように、横小口に朱墨や墨で色が付けられている例も見られます。また、本文の大部分(天註が書かれる部分)には、見出しやキーワードとなる語句が書かれているものもあります。

これらは、真澄が幾度となく調べるために使い、その際、時間を節約するためにおこなったものでしょう。現代でも、情報整理は学び方の大事な要素の一つとなっています。

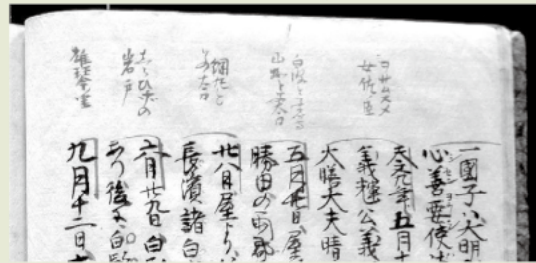
4 日記を見せる・読む

真澄の学びの大きな要因は、旅の中での見聞でした。真澄は、若いときの見聞も併せて日記を書いています。真澄は日記を、日々の記録としてのみ書くのではありません。日記自体が、真澄が旅をする文人としての証(あかし)でした。そのため、旅の中で情報交換のために日記を見せたり、あるいは読ませてもらったたりしています。

情報交換をしながら、自らの文章表現に磨きをかけていったことでしょう。

※小見出しの実際は、朱字で書かれています。

ヨサムスメ
女佐ノ臣
白波といふ名馬
山蜘蛛といふ太刀
綱丸と
いふ太刀
しらひげの
岩戸
雄琴ノ里



書写本《江源武鑑》に付された小見出し
大館市立中央図書館蔵、秋田県指定文化財

下北での日記《牧の冬枯》

寛政四年(一七九二)十一月十三日条
※真澄の随筆を見た人
秋浜武憲…下北の米穀商人兼旅館業

あが、なにくれと記したる随筆てふふみを見
きて、秋浜武憲といふ人のもとより、
そこふかき心の海と水くきのふでにし
たがふ人の言の葉

とぞ聞えたりけるかへし。
水くきの浅き心をいとふかくあはれを
そふる人のことのは

〔傍線部分意識〕私のあれやこれや書いた
随筆という書物を見たと言って…

5 書物の入手

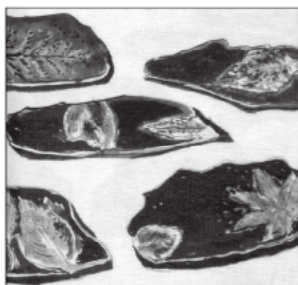
真澄がどのような書物を目にしていたかについては、例えば随筆で引用されている書物から考えることができます。随筆《筆のまにまに》全九巻における引用ベスト7をみると、俊訓菜(辞書) 39回、譚海(随筆) 20回、万葉集(歌集) 18回、日本書紀(通史) 13回、古事記伝(注釈) 12回、日本三代実録(通史) 10回、玉勝間(随筆) 9回で、この他にも、有職故実、地誌、説話、本草などの書物が引用されています。たくさん書物を、真澄がどこで見ただかについては、秋田に落ち着いてからの著作に引用が顕著ですので、藩校明德

6 硯へのこだわり

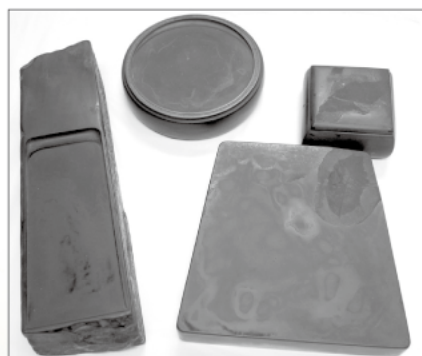
学び方には直接関係のないことですが、文具に何かしらこだわりを持ったり、収集したりすることがよくあります。

真澄は、長く異境の地で過ごした人ですので、そのような印象とは無縁に思えますが、高階貞房との書簡からは、真澄が硯の目利きであったことがわかります。硯は、文房四宝とされる筆・墨・硯・紙の中でも、一生使えるもので値段も張るため、もっとも選び方が難しいとされます。収集する目的がなければ、硯は何個も持つようなものでもありませんので、真澄も一点豪華なこだわりの逸品を持っていたとすると、真澄への印象も少しは違ってくるかもしれません。

真澄の肖像画に見える硯も、何か意味ありげに思えてきます。



真澄が描いた花紋石(別名・木の葉石、硯の素材として重宝された)
《雪の秋田根》(館蔵写本、部分)



白糸の滝(北秋田市森吉)周辺の石を素材に作られた木の葉硯/北秋田市・個人蔵
(右下硯〈裏側〉の右上、右上朱肉入れの蓋に、木の葉の化石がある)

館であろうという推測がなされています。さらに、文人仲間や蔵書家もいたことでしょうか。真澄が交流した人物に高階貞房がいます。秋田藩士で、国学を学んでいました。第九代藩主佐竹義和、次代の義厚に信任の厚い人で、延長を願い出たり、江戸に出た貞房に書物を買ってくれるよう頼んだりした書簡を出しています。このことから、一冊の書物を読むだけでなく、多くの手間や時間をかけたことがわかります。それだけに、書物を大事にして、少しでも多くのことを吸収しようとしたことでしょうか。

反神 誓約

真澄、書に託した想い

平成26年 10月18日(土)～12月7日(日)

1 望郷（父母や友を想う）

真澄の日記を読むと、望郷の念を示す場面が意外に多く出てきます。ある時には、冬の寒さに眠れずにいると、楽しかった京での父母との思い出に涙する場面があります（《奥の手ぶり》）。真澄の長い旅も、故郷や父母を想う感情を抱きながらの旅であったことがわかります。柳田国男は、『かすむ駒形』で正月の子供たちのやりとりを記録する真澄を、その場にとけ込めずにいる「さびしい真澄」としてとらえました（「真澄遊覧記を読む」）。真澄の眼に映ったのは、異境の地ばかりではなく、そこを通して見る故郷の姿だったのかもしれない。

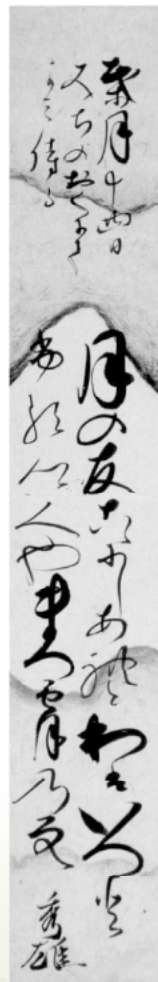
2 まじない（言葉への信頼）

古来から日本人には、言葉に霊力が宿り、表現した内容が現実を起こることがあると信じられてきました。これを言霊信仰と呼びます。言霊信仰には、言葉を積極的に使って言霊をはたらかせようとする考えと、言葉の使用を慎んだり避けたりする考えの二つの面があります。後者では、例えば、「死」に音の響きがつながる数字の四を縁起が悪いとして避けることがあるなど、現在の私たちの生活にも息づいています。言霊信仰は、特に和歌において受け継がれてきたといわれるように、真澄の遺墨資料にもいくつかの例を見ることが出来ます。真澄の、言葉に対する信頼の高さを知ることが出来ます。

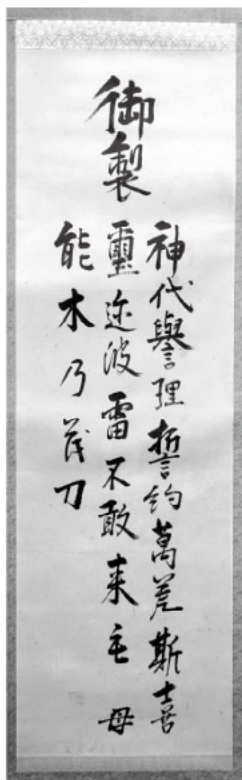
○「葉月十四日」（短冊、館蔵）

葉月十四日
みちのおくにて
よみ侍る

月の友こゝにしあれどわはいつと
ふる郷人やまつ宵の空
秀雄



※《錦の浜》第五部に同文の歌があります。享和元年（一八〇一）八月十四日、弘前（青森県）を出立する決心をした真澄が、送別のために訪ねてきた人々と月見をしながら、同じ月を眺めているであろう故郷の人々への想いを詠んだ歌です。署名にある「秀雄」は、真澄が秋田藩領に入る前までの名乗です。



○御製（ぎよせい、おほみうた）（軸装、館蔵）

神代譽理誓約萬差斯古
靈迹波雷不敢来毛母
能木乃茂刀
（真澄印）
神代（かみよ）より誓約（うけひ）まさしき
靈（しるし）には雷（いかづち）えこずもも
の木のもと

※大仙市土川の嵯峨家に伝わった資料で、桃や桃の木が持つ呪力を借りて病や災難を防ぐ、まじないの歌です。『古事記』と『日本書紀』（第五段一書第九）には、黄泉の国から逃げてきたイザナギノミコトが、桃の実を投げつけて難を逃れたとする物語があります。これは、桃の呪力を背景にした古くからの習俗が反映したものといわれます。

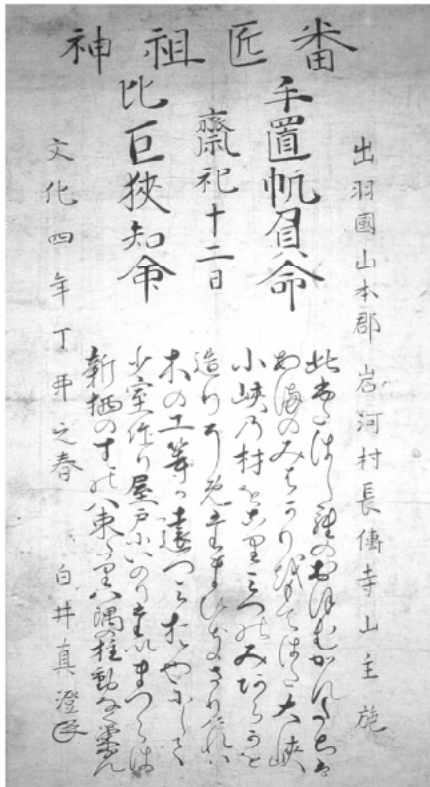
菅江真澄には、二百冊にも数えられる著作がある他に、一般に「遺墨資料」と呼ばれるたくさんのお書があります。書は、短冊・色紙・掛軸・書簡などの形態で残っています。遺墨資料には、交流した人々の求めに応じて書かれたものが多く、そこからは、真澄の願いや気持ちを読み取ることが出来ます。真澄は言葉の力を信じて、表現をすることによって旅を続けた人です。言葉やその使い方に真澄の人柄が表れていると言ってもいいでしょう。

本展では、真澄の遺墨資料を、望郷、まじない、敬神、言祝ぎ、手紙の五点から紹介しました。真澄の書を見たり読んだりしながら、その奥にある真澄の想いを読み取ってください。

3 敬神（神々を敬う）

八百万神（やおよろずのかみ）と言われるように、森羅万象に神の存在を認める考えが、古来から日本人にはあります。真澄は、最初の日記である『伊那の中路』の冒頭に、

「この日本国内のすべての古い神社を拝み巡って、幣を奉りたい」（意訳）と書いたように、神を敬う気持ちを旅の当初から持っていました。また、日記や地誌などの記録の随所に、日本書紀神代巻にある神名を挙げるなど、神についての詳しい知識を持っていたことが知られます。真澄は、神名を挙げてその神力を讃えたり、また、縁起を書いたりしています。それらの遺墨資料からは、真澄の心底にある敬神の気持ちを読み取ることができます。



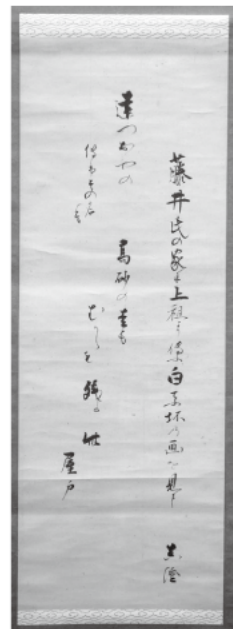
（部分拡大）

○ 番匠祖神（軸装、三種町・工藤貢司氏蔵）

天思兼命（あめのおもいかねのみこと）は、神名から曲尺が連想されることから、棟上げの儀式の主神とされます。また、手置帆負命（たおきほおいのみこと）と彦狭知命（ひこさしりのみこと）は、神話の中で、天照大神（あまのいわた）が天岩戸に隠れたとき、二神で瑞御殿（みまて）のみあらかを造営したことから、工匠守護の神として信仰されます。本資料（上写真）の左側に飾り文字と絵が見えますが、落款から、これは白井真澄（文化四年当時の名乗）によるものではありません。

4 言祝ぎ（繁栄や長寿を祈る）

真澄は、人の長寿や家の安泰を祈るとき、人と暮らしの安穩を歌に託しました。漢字で「言祝ぐ」と書くことからわかるように、本来、「ことほぐ」とは、祝いの言葉を述べ



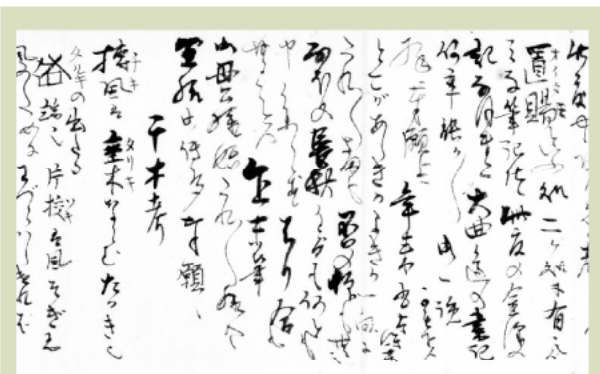
○ 「藤井氏の坏」（軸装、美郷町・大阪照夫氏蔵、寄託資料）

藤井氏の上に上祖より伝ふ白てふ坏の画を見て 真澄
遠つおやの伝ふその名も高砂の松もむかしも残る此屋戸

て相手の幸運を祈ることです。めでたい言葉には、さらなる幸運を呼び込む言葉が宿つていると信じられていました。真澄が人々の安穩を詞書と歌に託したのは、真澄らしい所作だったと言えるでしょう。

5 手紙（想いを伝える）

人の心情や考えが端的に表されるのが手紙（書簡）です。真澄の遺墨資料としては、知人に送った書簡が21通、書簡集「蝦夷錦」としてまとめられた鈴木常雄宛の書簡が8通知られています（※菅江真澄全集第十二巻記載の資料に、館蔵の「小西宮太郎宛書簡」を加えています。ただし、自筆資料としてすべてが残っているわけではありません。手紙の内容には、真澄自らの近況を伝えながら、真澄の悩みが語られることがあり、相手や相手の家族のことを思いやるような言葉もあります。手紙からは、真澄の息づかいが聞こえてくるようです。



○高階貞房宛書簡（十月九日付書簡、部分、館蔵）

特別展「菅江真澄、旅のまなざし」

平成二十六年九月二十日(土)～十一月九日(日)

秋田県内各市町村を会場にした第二十九回国民文化祭を記念し、当館では、菅江真澄関連の特別展を開催しました。

秋田の文化や歴史を語る時、真澄の記録の有無が話題にされるほど、真澄と秋田には深いつながりがあります。真澄がモノを見つめた「まなざし」に触れながら、重要文化財「菅江真澄遊覧記」八十九冊の全点や、真澄の記録に関わりのある資料を、六章に分けて展示紹介しました。



一、菅江真澄の旅と著作



二、真澄の肖像
くうた人・くすし・旅人



三、いにしえ憧憬
く遺物と歴史の記録



四、祈りの風景
く仏と神と



五、くらしのかたち
く北国をつむぐ



六、あきた遺産として



特別展付帯事業―報告―

写真展「真澄のいる風景」

菅江真澄が特に秋田県民に親しまれている一因に、著作に挿入された図絵の魅力があります。各地の二百年前の姿が、真澄の図絵によって鮮やかに、また詳細に眼前に現れます。写真の応募を通じて、真澄の著作についての読みを深めながら、博物館の展示に参加していただくことを目的に、「真澄のいる風景」と題した応募写真展を開催しました。応募に際しては、百五十程度程度の解説文を付けていただきました。（応募総数三十一名）



展示風景

応募写真から

撮影／恐山〔青森県むつ市〕

関係著作／牧の冬枯れ（寛政4年〈1792〉）

奥の浦々（寛政5年〈1793〉）

奥の手ぶり（寛政6年〈1794〉）

真澄は下北滞在中に恐山を5回訪れています。その日数は全部で38日にも及び、真澄の恐山に対する関心の高さが窺われます。

境内をくまなく見物し、風光明媚な景色を歌に詠み、下北の特産であるヒバ材の伐出作業を見学しています。また、湯治客からラクスマンが下北の岩屋の浦に漂着したことを聞き、そのことを書き留めています。

青森県むつ市・瀬川 威



講演会

第一回（九月二十七日・土）

演題／真澄が見た異形の神々

講師／大楽和正（新潟県立歴史博物館主任研究員）

第二回（十月十一日・土）

菅江真澄研究会との共催事業

演題／真澄のまなざしを考へる／あきた遺産の再評価

講師／石井正己（東京学芸大学教授）

※右掲二回の講演内容の詳細については、『真澄研究』第十九号に掲載しています。

第三回（十一月一日・土）

演題／真澄の国学性を考える

講師／松山 修（当館学芸主事）

本居宣長をはじめとする国学者の文章や考え、それに、秋田の国学者の言説を踏まえながら、広義の国学における真澄の国学性、さらには、狭義の国学における真澄の非国学性について述べました。

特別講演会（十月十八日、土）

演題／五郎が語る 真澄！

講師／橋本五郎（読売新聞特別編集委員、第29回国民文化祭あきた2014応援大使）

橋本氏の出身地である鯉川（三種町）について、真澄は『かすむ月星』に記録しています。新聞記者としての仕事と絡めながら、記録者としての視点、文体などについてのお話、真澄の記録をどう文化遺産として活かすかについてお話をいただきました。

上演会「語りつなく菅江真澄」

（十月二十五日・土）

・読み聞かせ二人会

特別展を機会に、菅江真澄の著作に記載された五つの伝説伝承を紙芝居にしました。その中から、「うしのひょうごまる」「さんかんざくら」「やしゅうろうの竜」を、ボランティア・アイリスの会会員でもある佐藤広子さんと鈴木田鶴子さんに演じてもらいました。

・男鹿市菅江真澄研究会

国重要民俗文化財「男鹿のナマハゲ行事」については、真澄の『男鹿の寒風』に記載された文化八年正月十五日の記録が最も古いものとされています。男鹿市菅江真澄研究会の皆さんが、ナマハゲ行事を真澄の記録に沿って再現することにより、現在の習俗との違いを明らかにしてくれました。

・中川文字、猿倉人形芝居

語り部として活動している中川文字さん（羽後町）から、真澄が『雪の出羽路雄勝郡二』に記録した「佐太子沼の伝説」を朗読してもらいました。また、中川さんが所属する猿倉人形芝居は、明治時代にはじまり、秋田県内で長い間親しまれてきました。真澄の時代以後となりますが、いわゆる「民俗芸能」に向けた真澄のまなざしに倣おうと上演していただきました。

展示解説会（期間中三回）

特別展の企画・展示をおこなった学芸職員の松山修と丸谷仁美が、展示の見所と資料について、九十分程度御案内しました。



寄贈図書

(平成26年2月〜12月)

- ◆菅江真澄研究会 菅江真澄研究第82号
- ◆寺内史跡研究会 「水の面影」現代語訳
- ◆田口昌樹 あきた浪漫 第36・37号
- ◆奈良女子大学日本アジア言語文化学会 叙説 ◆細川純子 菅江真澄の文芸生活 ◆男鹿市菅江真澄研究会 男鹿五風(会誌第二十号)
- ◆石黒克彦 菅江真澄と下北半島 ◆三種町琴丘文化財保護協会 三種町琴丘地域石材造形物―調査報告書― ◆学校法人瓜生山学園京都造形芸術大学出版局 暮らしに息づく伝承文化 ◆日下部洋行 アイヌの世界を旅する

※寄贈図書は、スタディールームで御覧いただけます。

企画展

男鹿・南秋の自然と文化

平成26年11月29日(土)～平成27年4月5日(日)

菅江真澄資料センター担当

菅江真澄と男鹿・南秋の板碑

菅江真澄は、旅の中で梵字が刻まれた石の造物に注目して記録しました。これは「板碑」と呼ばれるもので、造立することによって得られる御利益で、主に亡くなった人の冥福を祈ることを目的とした供養塔です。ですから、お墓とは異なります。

秋田県内の総数については318基とする報告もありますが、調査によって増えていく傾向にあります。板碑は八郎潟周辺にもっとも多く、男鹿・南秋地域では現在257基を数えます。男鹿・南秋地域の板碑は、主に1350年代前後に建てられています。素材となった石には、森山(五城目町)周辺や寒風山(男鹿市)のものが使われています。

菅江真澄の記録を手がかりとし、男鹿・南秋地域の板碑を見ることを通して、身近な遺物に注目していただくことを主眼としました。

※本展示は、藤田守さん(井川町)による男鹿・南秋地域の板碑悉皆調査に依拠しました。



上図絵：《ひなの遊び》から小池板碑群

展示：小池板碑群(八郎潟町)の板碑拓本(拓本採集：藤田守)

表紙解説

紙芝居表紙

絵／たいねいじのばけもの(鈴木田鶴子)、うしのひょうこまる(服部淳子)、やじゅうろうの竜(宮腰武久)

特別展「菅江真澄、旅のまなざし」の開催に際して、菅江真澄遊覧記に記録された伝説伝承を紙芝居にしてみました。菅江真澄の記録を子どもたちに親しんでもらい、まずは「すがえすみ」の名前を知ってもらうことを目的としたものです。学芸職員が真澄の記録を現代語訳にしたり、物語風にリライトした上で、描き手の方々に原稿を渡しました。それを場面割りをしながら、一話あたり十枚程度の絵にしてみました。実際に学童保育や幼稚園などで上演してもらい、聞き手である子どもたちの反応を見ながら、文言を変えたり、付け加えたりもしました。特別展の期間中、わくわくたんけん室での読み聞かせ(ポラントシア・アイリスの会)、展示室入口での学芸職員による読み聞かせをおこなったりしました。

菅江真澄の記録には、魅力溢れる伝説伝承が数多く含まれています。紙芝居づくりは、子どもたちの興味を引くばかりではなく、文章の読みの深まりにも通じることを実感しました。継続していきたいものだと思います。描き手を募集いたしますので、是非とも御連絡ください。

今回作成した紙芝居のタイトルと出典は、次の通りです。「たいねいじのばけもの」《月の出羽路仙北郡一》、「やじゅうろうの竜」《雪の出羽路平鹿郡十一》、「うしのひょうこまる」《雪の出羽路雄勝郡四》、「いなにわのこだちさめ」《雪の出羽路雄勝郡二》、「さんかんざくら」《雪の出羽路平鹿郡十》

編集後記

・国民文化祭を記念した、特別展「菅江真澄、旅のまなざし」を開催しました。一週間のくん蒸消毒があつて展示前に収蔵庫に出入できない上、資料借用先が多かつたため、夏の暑さなかからの資料借用、冬タイヤを装着してからの資料返却となりました。また、特別展のPR展として、橋本五郎文庫(みたね鯉川地区交流センター)、美郷町学友館、旧金子家住宅(秋田市)で、それぞれ小さなパネル展示をおこないました。協力していただいた施設のスタッフ、特別展の資料所蔵者、付帯事業を共催していただいた菅江真澄研究会の方々へ改めてお礼を申し上げます。(松山)

真澄

MASUMI No.32

発行日◎平成27年3月20日
編集・発行◎秋田県立博物館 菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足鳩崎字後山52
Tel.018-873-4121(代)